

## 卓球漬けだった高校時代

児玉 圭司(5期)

私は、昭和 10 年東京駅まん前の日本橋呉服橋で生を受け、城東小学校 4 年生のときに、武州(埼玉県)の東松山に集団疎開をしました。我家は、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲で全焼し、家族は京橋へと移りましたが、そこも5月の山の手大空襲にて被災。戦後、新橋に引越をして、そこで中学・高校・大学時代を過ごしました。

中学は、新制中学の第一期生ということもあって、5 年間は上級生がいなかったのので、当然のように敬語の使い方も知らず、礼節などは無視、城南高校に入学して、はじめて上級生を知り、とても困惑したことを覚えています。特に入学した当初は、口の利き方や、格好が生意気だ—ということで、上級生に殴られたりしました。

私は、小さい頃から運動が得意で、走ったり、泳いだり、野球をしたりと、何をやっても割合と目立つ存在だったと思います。

中学時代は、ローラースケートで学校へ通ったりしていたので、足腰は非常に強く、地域のスポーツ大会には色々な競技に参加していました。

終戦直後は校舎の数も少なく、私が通っていた北芝中学は、小・中・高が同じ校舎で同居していました。

中学 3 年のある日、中学対抗の水泳大会が終わり、校舎に帰ってくると、講堂で高校の女子学生たちが卓球をやっていました。

その美しいラリーを見た瞬間、私は卓球の虜になってしまったのです。それが、私と卓球の出合いです。

当時は、東京中どこへ行っても卓球場がありました。春休みということもあり、私はその日から、毎日卓球場に通い詰めました。1 度試合に負けると 1 時間待たなければ順番が回ってきません。私は朝 9 時から夜 9 時まで卓球場に入り浸りでした。

卓球場にはずっと勝ち続けている主のような人がいて、私は来る日も来る日も、あの人に勝つにはどうしたらいいかと考え、一所懸命観察し、勉強しながら、実践を重ねていきました。



そうして高校入学までの1か月間、卓球漬けの日々を過ごし、遂にその主に勝てるようになりました。

城南高校では卓球部に入部。毎日朝早く起きて、4～5キロランニングすることを日課としました。

これは誰に言われたわけでもなく、卓球は足腰が大事と思い、自ら進んで始めたトレーニングです。コーチを受けた経験がないので、何でも自分で決めて行動しました。とにかく卓球が好きで好きで、寝る間も削って人一倍努力しました。

高校入学後の半年ぐらいは、上級生に殴られたり、脅されたりもしましたが、道を誤らずにすんだのは、卓球のお陰だと思っています。

城南高校は、卓球があまり盛んではなかったこともあり、近くの強豪校へ他流試合に出かけたりしました。

そして、高校2年の秋には、全日本ジュニア選手権の東京都代表、3年では国体の東京都代表に選出されました。

高校時代は、派手な行動で物議を醸すことも多くありましたが、全日本や国体の代表になったときには、校庭の壇上で挨拶をさせていただき、全生徒から5円ずつのカンパをもらい、激励もしていただきました。楽しく、とても充実した3年間だったと思います。

明治大学3年の時、世界選手権の日本代表に抜擢され、日の丸をつけて世界と戦いました。このときは朝、雪が降り積もる寒さの中で、「俺は外国選手に絶対に負けないぞ！負けないぞ！」と、つぶやきながら走り続けたことを今でも鮮明に覚えています。結果はベスト16。当時の世界チャンピオン田中利明選手に同士討ちで敗れましたが、本当に夢中で濃密な時間を過ごしていたように思います。

卓球を始めて5年半、コーチについて指導を受けたこともない私が日本代表メンバーに選ばれたことを振り返ると、私が持論としている「努力に勝る才能はない！」、ということ強く実感いたします。明治大学卒業から3年後には卓球部の監督となり、26歳で関東学生卓球連盟の理事長に就任、そして、昭和40年、私の人生を左右するような大きな出来事が起きました。それは『世界選手権(ユーゴスラビア大会)』の監督に推挙されたことです。

当時は、兄と共に立ち上げた会社もまだ軌道に乗らず、ヨチヨチ歩きの状態でしたが、迷いに迷った挙句尊敬する方々のアドバイスもあり、引き受けることにしました。仕事と卓球の両立は必ず出来るという信念のもと、懸命に努力を重ねてきました。

「絶対にあきらめない執念」「情熱があれば事は成る」「熱意は自分を動かし、人を動かす」「感動・感激を味わう」「量は質に転換する」「努力は才能に勝る」など、卓球を通して得た教訓は、私の人生と企業経営の基礎となり、土台となっています。

小学校の恩師に「40を過ぎてから本当の顔ができる」ということを教わりました。その時その時一生懸命に良い人生を送っている人は、とても良い人相になる—ということが、ずっと頭

に残っていて、人相の良くなる人生を送りたいと思い、何事にも努力し続けました。

私は本をよく読みますが、20代後半に読んだ山岡荘八の『徳川家康 全26巻』に感銘を受け、幾度となく読み直しています。そして、読む毎に新しい示唆を得ています。

力がないといった惨めさや、苦しさがあつたとき、『天は我に過酷な定めを与えた』『我は天に試されている』と考え、辛抱強さや慎重であり尚且つ大胆、絶対にあきらめない執念、といったことはこの本によって教えられました。

さらに、『武士や領民は自分の持ち物ではなく、天下からの預かりものである』という考え方にはとても深く感動し、この言葉は、私の企業経営において、大きな影響を与えてくれました。

このような経験を経て、今、私が若い人たちに伝えたいことは、「出る杭になりなさい」「背伸びをしなさい」「自分よりレベルの高い人とお付き合いをしなさい」ということです。

そして、さらに勉強して、また背伸びをして、もっとレベルの高い人とお付き合いができるように努力を重ねて欲しいと思っています。

運には、天運・地運・人運とありますが、人運とは、人との出会いによってもたらされる運のことです。出会う人によって、自分の人生が大化けすることがあります。

私は、「より良い人間関係の中により良い自分がある」ということをモットーにしていますが、私自身、これまでの人生の節目節目において、素晴らしい出会いがたくさんありました。そして、後押しをしていただきました。

ぜひ、人との出会いと絆を大切に、生きる希望にあふれ、感謝の心を忘れず、明るく前向きに人生を歩んでいってほしいと強く願っています。

)